佐倉蜜柑の兄は運命に抗う

こむぎ子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▼死んだ記憶もなく、突然学園アリスの世界で佐倉蜜柑の双子の兄、佐倉来夢として生きることとなった。▼その中身は原作を知る２０歳超えのごく普通のオタク女子。▼心身に矛盾を抱えたオリ主が、原作の運命に立ち向かう物語。▼初書き、初投稿です。マイペース更新。

目　次

プロローグ ―――― 1
０１話　今井蛍とコンテスト ―――― 3
０２話　脱走の果てに ―――― 14
０３話　自分に出来ること ―――― 26

プロローグ

なんかゆらゆら揺れている。朦朧としている意識の中で、まるでゆりかごに乗せられてる感覚に寝ぼけ感覚ながらも驚く。でも目をあけたくない。ざくざく。音が聞こえる。なんの音だっけ。聞いたことある音のはずなのに思い出せない。考えることも面倒になってきた。ゆらゆら。ざくざく。もう一度眠ってしまおうか。そう思った途端に、身体に圧迫感を感じた。ちょっと苦しい。やめてくれ。

「みかん……みかん……」

誰の声だろうか。私の名前ではない。でも私を呼んでいるかのように耳元から声を感じる。誰だろう。目をあけたくなったけど力が入らない。ゆらゆら。ざくざく。あぁ、思い出した。

「らいむ……っ」

これは確か雪を踏みしめる音だ。

暗転。

「4才の誕生日おめでとう」

お年玉がプレゼントじゃ、と干支が描かれたぽち袋を渡された。自分の意思関係なくありがと、といって小さな手でぽち袋を受け取った。待って。4才？4才って誰のこと言ってんの。間違っても自分のことじゃないよね。二十歳過ぎたもういい大人だっての。そして間違っても4才の子を産んだ覚えもない。

「ほれ、蜜柑も」

みかん？そこで自分の隣に小さい女の子がいたことに気付いた。じーちゃん！ありがとう！と元気な声が響く。このツインテールの女の子、見覚えがある気がする。しかも蜜柑という名前。でもあまりにも小さい。

「新年明けましておめでとう。今年もよろしゅうな」

暗転。

桜がひらひら舞っている。ぞろぞろとまっすぐに歩く大人と子供。みんなおめかししているようだ。ここはどこだろう。

「らいむ！はやく行かんと遅れるで！」

ぐいぐいと右手を引っ張られる。さっきの女の子だ。でもさっきよりも大きい、気がする。やっぱりこのツインテールの女の子、どっからどう見ても。

「一年生のみんなー！集合写真撮るから急いで集まってね！」

「あぁ！もう始まっとるよぉ、じぃちゃん待っとるから急がんと！」

『××年、小学校入学おめでとう！』

学園アリスの主人公にしてヒロイン、佐倉蜜柑だった。

こうして私は何の前触れも無く、完結した「漫画」の世界にいた。自分の手を見る、とても小さい。私は本来成人済みのはずで、こんな事はありえない。記憶は久しぶりの休日に「学園アリス」を読んだ記憶で途切れている。

小学生の頃からハマり完結まで追いかけた好きな漫画だ。完結したらリアルでのことが忙しくもあり、すっかり遠のいていた。だから実家にあるこの漫画を一気読みして休日を満喫していたのだ。

これは夢でも見ているのだろうか？

誰か助けてください。

01話　今井蛍とコンテスト

今日は転校生が来るらしい。この話題は1週間ぐらい前から、狭い狭い学校の中ですぐに広まった。小学4年生、春。佐倉来夢という名の「わたし」はすぐにとうとう来たか、と思った。

「来夢！転校生やって！なかよくなれるとええねんけど…！」

残念ながら最初のうちは君自身が避けちゃうけどね、というのを心に留めて片割れの蜜柑にテキトーな相槌をする。あーそうなるとええなんて言うと頭掴まれた。ちょっと痛い。

「なんやー！来夢は興味ないんか？せっかくの転校生やで!?」

「あるある、めっちゃある気がする。あー気になるぅー」

「返事がてきとうすぎん!?」

「そこの佐倉ツインズ、静かにしろ」

先生に怒られるとらいむのあほぉと後ろから聞こえてきてもシカトするしかない。先生の話半分に聞きながら、これから来る「今井蛍」のことを考え、更にはその未来に思いふける。

原作開始まで秒読み段階なのだろうな、と心が重く感じた。

「学園アリス」の世界だと気付いたのはすぐだったが、自分の存在を肯定することに時間が掛かった。

佐倉蜜柑、主人公にして安積柚香と行平泉水との愛し子。アリス学園でめくるめく因縁と向かい合わせで頑張っていくお話だ。しかも明るく楽しく。いや後半は重いけど。

そんな「物語」の中で「佐倉来夢」という佐倉蜜柑の双子の兄なんて異物は存在しない。

しかも中身は二十歳超えた女性。俗に言う輪廻転生とか迎えた訳ではない、と思う。

自分が死んだという記憶もなく、「わたし」は学園アリスという物語を知っている。

初めは夢を見ているんだと信じてた。それも年を重ねるごとにその可能性を捨てた。こんなに実体感のある夢を10年間分の長さも見てたまるか。そしてひとつの可能性を思いついた。

パラレルワールド。
あったかもしれない世界のひとつ。それが「佐倉来夢」という主人公の双子の存在。
なにが原因かわからないが、「わたし」という精神がそこに憑依したのではないか。
だから小学生男子の身体でありながら大人の女性の精神というちぐはぐな存在が生まれたのだと思う。でなければ別の可能性がこの脳みそから他に出てこない。
マンガ脳と言われるだろうが、現時点ではこれが最有力候補なのだ。
「入ってきてええよ、転校生」
考え事している間に転校生を紹介に入ったようだ。ガラリ、と期待の目線が多いなか古ぼけた扉が開く。わぁ、実物も美少女だ。
「今井蛍です。よろしく」
簡潔に、素っ気なく。原作を知っているから言えることだが、転校慣れしていることがわかる態度だと思う。
そしてどことなく都会っ子ぽいというか、田舎ぽくないからこの空間の中で一際目立つ。クールだと思うのもわかる。
関係ないが黒板に書かれた名前はきれいだったが、まだ拙いところがあるのが小学生ぽくて可愛かった。
「ほたるちゃんっていうんや！どこからきたん？」
「なぁなぁ、好きなものは？」
「近くの席やから教科書見せるで！」
さっそくホームルームが終わって今井蛍の周りがわぁっと人で囲まれている。
それを澄ました顔で答えてるところも美少女だ。そして予想通りだ。
きゃあきゃあうるさい所から離れた席にいる自分たちはすっかり蚊帳の外だ。
「みかん、楽しみにしてたんだろ？行かなくていいんか？」
後ろを見ると案の定ぶすくれた主人公がいた。

??

この世界を自覚してからそこそこ苦労したし楽もしてる。
苦労は精神と肉体の不一致。それと環境。
中身成人女性ぞ？男子の身体で生えてるもんは違和感しかない。
そしてまだ大きくないとはいえ恥ずかしかった。
小学校での着替えもみんな可愛らしいなうふふで今は済ましてるがあと数年が怖い。
「俺」っていう一人称も慣れるまで時間が掛かった。下手に失敗したくないもんだから幼少期の一部無口で過ごした。
関西弁なんて元々が違う言語で育ってきたから、なじむまでめちゃくちゃ緊張した。
そして都会に憧れていつか行きたいと思っているから関西弁でなく標準語の練習をしているためたまに変な関西弁になったりするという無理くりな設定をつけた。
あとどうしても大人だから達観してしまう。変に思われないように楽しむ時は楽しむように、甘える時は甘えるようにしてみるものの、「頼りになるお兄ちゃんね」「大人っぽい子ね」とかよく言われる時点で無意識的にしろ矛盾が出ているんだろう。
同世代の子と喧嘩したこともなければ辞書も無しでうっかり難しい漢字を書いたり、作文で明らかに他の子と差があったりした。
それでも変な子と蔑まず、熱心に育ててくれたじいちゃんに感謝している。
楽をしている点は、場面が飛ぶ時があるのだ。
うまく説明できないが０歳から年を重ねている時間は過ごしてない。
キーポイントというか、何かしら過ごした「場面」を終えると暗転して次の「場面」に移る。
春の入学式を終えたと思ったら暗転して数ヶ月後に飛んでお祭りを楽しんでた。自分がした記憶がないけど周りが勝手に覚えていて

そこは怖かった。
１週間飛ばないでいたと思ったらいきなりひと季節飛ばされて落ち着ける人がいたら是非ご教授願いたい。
他の人からの評判を聞いてる限り、男子のリーダー格でよく遊んだりしながらも勉強ができる優秀な子だそうだ。
小学生の授業なんて寝てもわかるし、確かに成人女性の身体とちがって運動神経もいい。しかし出来過ぎな気がする。
苦痛の１０年間というよりは戸惑ってたらもう１０年経ってたという感じだ。
そして気が付いたのは、原作開始に近づくにつれて暗転の間隔が無くなっているということ。
こうなってくるとますます原作のために「わたし」が用意されているように感じる。
「わたし」を精神にもちながら「俺」として違和感ないように過ごしてきたことに意味はあるのだろうか。
学校が終わって帰ると蜜柑のちょっとした愚痴に付き合い、さあ寝るかという瞬間暗転。
目を開けるともうすぐ開催の美少女コンテストのチラシが貼られる時期だった。

??

「来夢くん、ちょっといいかしら」
秋風が強くなってきた頃、今井蛍もこの学校に慣れていき、先日の美少女コンテストも原作通り優勝していた。
蜜柑とはちがい、クラスメイトとして話すことはあっても個人個人では初めてではないか。
いや先日の美少女コンテストも蜜柑に頼まれて応援には行ったときに少し話したが、それっきり今井蛍と特に会話はしてない。
「どうしたん？珍しい」

「これ」
ペラリ、と今井蛍が手にしてるものを見せてくる。このチラシ、このシチュエーション、デジャヴを感じざるを得ない。文字を見ると「美男子☆コンテスト」と大きな文字で書かれてた。見たくなかった。
「キャラが被らない限りは、顔がいい子とつるんでたほうが得なのよね」
「それ蜜柑にもいってたやつじゃん」
「あなたいたかしら？」
いました。漫画にするとコマの外だろうけど蜜柑の近くにいたから覚えている。まぁいいけどと美少女が期待の目で話を進めてくる。誰かたすけて。
「俺美男子なんて言われたことないんだけど」
「自覚ないのね。それでも私の目利きに間違い無いと思うの」
ズイズイとくる感じに押され気味な自分に不甲斐なさを感じる。
佐倉来夢の容姿は行平泉水に瓜ふたつ、という感じなのだろう。基準が少女漫画なので自覚ないのだが目元は蜜柑とそっくりらしい。目元以外は似てない二卵性双生児だ。
原作では行平泉水は性格に目が行きがちで忘れてたが顔もそういえば良かった。なら親譲りの自分の容姿も良いほうなのだろうと納得。
しかしそれとこれとは別だ。進んで人前に出るタイプでは無いのだ元々の精神は。
「私がプロデュースするから出場して。そして優勝しましょう」
「待て待て待て待ていきなりすぎませんか」
「大丈夫。あなたは優勝できる素材があるの。今回はグループ出場じゃないし、あとはアピール次第では勝ち確定よ」
「アッ　優勝商品がまんぷくぷく亭のカニ食べ放題招待券だ！これか！これが目的だな！」
「話が早いわね。さすが優秀と名高い来夢くんね、これが記入事項よ」
「優秀とかなにそれ初耳。そして手際良すぎません？俺参加するなんて一言も…」

「蛍〜〜なにしとるん？　あれ？来夢といっしょになにしゃべってんの？」
　美少女コンテスト以来今井蛍にベッタリな片割れの登場にはよ引き取ってくれと願いをこめて蜜柑を見る。
「美男子コンテスト？」
「そーだよ今まさしく蛍に迫られてる所なんだよ、蜜柑連れていっ……」
「えーっ！来夢もコンテスト出るん!?楽しみや〜〜!!」
「あっ、ダメだこれ挟まれた」
　押しに弱い俺、佐倉来夢。逃げられない事を確信した。
「うちと双子やもん、優勝間違いなしや！」
「優秀な遺伝子よ、来夢くん。まんぷくぷく亭は６人まで招待できると書かれてるしあなたを損させないわ」
「いや確かに俺もカニ好きだけどさ」
　公式設定でカニ好きと明言されてる蛍の目の輝きが尋常じゃないし、ど田舎の此処しか知らない蜜柑はちょっとした遠出と食べた事ないカニに心惹かれている。２人で勝つ事前提でもう話を進めているし始めから拒否権なんて無かったんだ。
「６人やからうちと蛍と来夢と、じーちゃんと蛍ん家のおとーさん、おかーさんで人数ピッタリやね！」
「電車で２駅だしカニ食べ放題プラス他のメニューも素敵ね……」
　２人がキャッキャとはしゃいでいる手前、己の羞恥心とか何それ美味しいの？と一蹴されるのは明白。潔く諦めよう、参加するしか道はないと。
　ふと、何か自分に旨味が欲しいと思い、蛍のアリスを思い出した。
　ピン！と普段蛍が使ってるものでいい事を思いついた。
「わかった、コンテストに出るよ。代わりに欲しいモノがある」
「あら何かしら？」
「んん？来夢のほしいもの？」
　この時点で蛍はアリスの事なんて話してないし、原作を知っているからこそ、ある意味ズルで発明のアリスを知っているのだ。その蛍の

何か発明品が欲しい。
　蛍が発明品と言ってなくて、でもクラスメイトでも目についたもの。
「蛍が使ってるペン、俺らが使ってるペンとなんか違うよな？」
「え？そうなん？」
　あくまで「学園アリス」は現代日本のお話ではあるが、そのペンはまだこの時代にはない「消せるボールペン」だとクラスで使ってるのを見て分かった。変わったの持ってるねーでみんなから流されてたけど、便利な社会で生きてきた「わたし」としては、なんか懐かしいとも感じるモノなのだ。
「このボールペンかしら？」
「そうそう！なんか便利そうだし、複数持ってたら一本欲しいなって」
「へぇ～～ペンなんて欲しいん？」
「ベンキョー嫌いな蜜柑はわからんだろうけど、ボールペンで失敗するとメンドイんだよ」
　パッと見、スタイリッシュな普通のボールペンだけど所々ナマケモノのデザインしてあるのを見る限り蛍の発明品だろうと思う。
「よく見てるわね、このボールペン一回書いたあとでも後ろの部分で消せるのよ」
「ほぇ～～」
「やっぱり」
「でもこれ、一品モノで複数持ってないの」
「あ、そうなんだ」
　じゃあ、貰えそうにないかな。残念だけど。一品モノってことはやはり蛍の発明品で間違いないようだ。
　ちょっとガッカリしてると、でも、と前置きして蛍がボールペンを差し出してきた。
「あなたが優勝するならあげてもいいわ」
「俄然やる気が湧いてきた」
　ガシッとお互いに熱い握手を交わす。蜜柑が切り替えはやない!?ってツッコんでいるけど人間現金な生きものなんだよ。「わたし」

にとって懐かしいボールペンであり、あの蛍の発明品が貰えるもんなら安いことよ。
「あなた、付き合いやすそうな性格ね」
「お褒めにあずかり光栄です」
「えぇ～～なんか急展開やけど、蛍と来夢が仲ようなって嬉しい！」
ギュウッと蜜柑に蛍と一緒に抱きつかれた。苦しい。
俺が言う前に蛍が蜜柑をしばいてた。
こうして蛍はカニ食べ放題のために、俺は蛍の発明品ボールペンのためにコンテストに向けて関わり合いを持った。
後日もちろん優勝した。

??

今井蛍にとって、転校は日常の一部であった。両親に手を引かれて、各地を転々としアリス学園から逃げ回る生活で、まともに友達をつくることもしてこなかった。
「今井蛍です。よろしく」
この学校、この土地でもまたタイムリミット付きだと思うと憂鬱でなくとも、みんなと仲良くなると言うことに必要以上の意味を見出せてない。そう思っての自己紹介でもあった。
淡々と、事務的に。わいわいと集まってくるクラスメイトとなる人の質問責めにあいながら、ふと遠い席に仲良しげな男女２人がいるのを気付いた。
「あの双子は相変わらず仲ええなぁ」
「蜜柑ちゃん、今日遊ぼう」
「来夢！放課後サッカーしようや！」
「佐倉ツインズ、静かにせぇや」
その２人は珍しい男女の双子で、狭い土地でもみんなから愛されて育ったんだと分かった。佐倉蜜柑は自分とは違うタイプのかわいい子で、特に笑顔が眩しかった。
コンテストの誘いをキッカケに、今井蛍は佐倉蜜柑といっしょにい

るようになった。
「うち蛍が一番の友達やねん！」
蜜柑の真っ直ぐな友愛は、今まで知らずにいた心の柔らかなところに届いて、蛍は表には出さないが幸せであった。
逆に、蜜柑の双子の兄である佐倉来夢も目を惹く容姿をしていたが、クラスメイトとしての関係でしかなく、性格も蜜柑とは正反対とは言わないけども全然違った。
「来夢またゲームしようや！」
「ええやん、どんなルールにする？」
「宿題おしえてぇな～らいむ～」
「えー自分でやらんとチカラにならんで？しゃーないなぁ、少しだけやぞ」
「来夢くん、女子と男子で別れてドッヂせぇへん？」
「んーそうすると人数差出るから混ぜようや。クジ引きにする？アミダでもええな」
クラスのみんなに慕われてて、頼りにされている。蜜柑も慕われてるけど、来夢はみんなのまとめ役的な存在でもあった。
「来夢くんと蜜柑ちゃん、相変わらず仲ええ兄妹ねぇ」
「おじいさんから聞いたで？来夢くんまたテストええ点取ったんやって？うちの子も見習って欲しいわぁ」
地域のみんなにも信頼されてて、しっかり者の双子の兄。そんな印象だった。
だから蜜柑とコンテストに出て、その応援に来た来夢に会った時も、小さな会場でも迷子になった私達より年下の子の面倒を見ていても驚きはしなかった。
「その子の親は見つかったの？」
「いや、おねーちゃんと来たみたい。ここの会場小さいからすぐ見つかるよ」
蜜柑と離れていた僅かな時間。応援に来た来夢と話す時間があった。
たまに、佐倉来夢という人は本当に私達と同じ歳なのか分からなく

なるくらい大人のような言動をする。大人っぽいのではない。なんと言えばいいか分からないが、視点が別次元のように感じる時がある。
　よしよしと背中を撫でている手がとても慣れているように感じる。
「おねーちゃん見つかって良かったな」
「……知ってる子？やたら慣れたあやし方だったわね」
「んーや。でも蜜柑もよく泣くし、それで慣れてんのかも」
　確かに蜜柑はよく泣く、よく笑う。そして気づいた。来夢もわらうが、どこか一歩引いた所にいるのだ。自分ごと客観視しているのだろうか。
「蛍は一人っ子？」
「……兄が」
　それしか言わなかったのに、そっか、と呟いたきり来夢が追求することは無かった。彼は人の心情の機敏によく気付くのだろうか。それ以上踏み込んで欲しくない部分を決して踏み込まない。
　蜜柑が単純なぶん、来夢はよく分からないところがある。けど、その距離感は蜜柑とは違う心地よさを感じた。
「今日はお誘いいただきありがとうございました」
「なぁに、今井さんたちには蜜柑も来夢もお世話になってます故、今後とも仲ようしてやってください」
　佐倉家と今井家でのまんぷくぷく亭での食事。お父さん、お母さんと蜜柑たちのお爺さんが話している間、私達3人は目の前のカニに夢中だった。
「カニってこんなに美味しいもんなんやな～～！」
「そうだな～～。田舎のコンテストの賞品がこんな豪華なもんだったとはって今実感した」
　一方で蛍はショッピングも出来ないような町でも、このクオリティのモノが食べれることに感激していた。
「改めて優勝おめでとう、来夢くん」
「ありがとうございます。……コンテスト内容が恥ずかしいですけど。今井さんたちもじいちゃんもカニいっぱい食べてな」

「蛍の食べるスピードがスゴいことになってん……！」
　食べて、笑って、家族がいて、蜜柑たちがいる。幸せな時間だった。
「蛍」
「ん？」
「ボールペン、めっちゃ使いやすいわ。ありがとな」
　自分がアリスということも、自分のアリスについても話したことはないが、来夢はアリスで作ったペンをただのペンではないと見破った唯一の人だ。顔には出ないがその時は心底驚いたものだ。
「そんなに喜んで使ってもらえるならボールペンも本望よ」
「そう？持ってて疲れにくくにし、綺麗に書けるしでコレ、気に入らない人はいないよきっと」
　もともと板書するのが億劫なとき、あまり目立たないように楽できるモノとして作ったのだ。真っ当な使い方である。
「えへへ、美味しいね蛍」
「そうね、蜜柑の皿の方がカニの足少し太いわね」
「なーっ！食べ放題やん！わざわざうちから取らんでもよくない!?」
「まぁまぁ。すいませーん、追加お願いしまーす」
　普段は男子グループにいるので蜜柑ほどいっしょにはいないが、来夢ともよく話すようになった。
　今井蛍にとって佐倉蜜柑と佐倉来夢は、それぞれ忘れられない人となったのだった。
　――だから、もう大丈夫。
　この土地に転校してからおよそ1年後、今井蛍は大好きな人達のために、アリス学園に転入することを決めた。

０２話　脱走の果てに

わいわいガヤガヤと村の人達が集まって蛍を見送りに来た。とうとう原作の一話がはじまるのだ。
「蜜柑ちゃん遅いねぇ」
「どうしたんやろな」
学校の子たちが蛍の親友の登場がまだないこと不思議がっていた。原作の知ってるから言えることだが、蜜柑の言う通り蛍の愛は分かりづらい。
「蜜柑もそろそろ来るよ、蛍」
「来夢くん」
カメだかスッポンだかのメカ片手に蜜柑が走ってくるはずだ。そうなると蛍と会話も出来ないだろうし、あの蜜柑と蛍のやりとりに間に入るほど無粋ではない。今のうちにお別れをする。
「蜜柑に黙っておいてくれて助かったわ。あの子知ったら毎日泣きついてくるの、目に見えるから」
「まぁ、たしかにな。それに蛍から蜜柑に話すんだろ？まだ来てないってことは何かしたん？」
既に知ってることだが聞いておかない訳にはいかないだろう。これから先も知らんふりをする気苦労が確定して少し落ち込む。
「ええ」
「……そっか。次会えるのいつだか分かんないけど、元気でな。餞別、車の中ででも食べて」
「ありがとう」
「蛍ーーーー！」
さっくりとお別れをした後遠くから蜜柑の声が聞こえて、２人して振り向く。「大ボケボケナスゥーー!!」を開幕に２人の劇場が始まったのでサッと身を引く。
ちなみに餞別の中身は佐倉家お手製（蜜柑をのぞく）ミニカップケーキです。こんなド田舎でもホットケーキミックスは優秀なのだ。
そうこうしている内に蛍が車に乗って、みんなに見送られていっ

た。
　遠くに行く車を見ながら、隣でベソベソ泣いていた蜜柑が縋り付いてきた。
「来夢もなんで黙ってたんやぁ」
「蛍も言ってた通りだよ。蜜柑が泣きついてくるだろうからって。それに蛍から蜜柑に伝えるって言われてたん」
「うぅ、それにしたってこんなギリギリなんて、蛍も来夢もハクジョーもんや！」
「そうやね、ごめんごめん」
　蛍の事情も蜜柑の気持ちもわかる分、自分に出来ることは今べそかいている蜜柑を宥めることだと、纏わりついてくる妹の頭をひたすら撫でる。
　ひどい、あほぉ、（蛍から教えてもらった）冷血漢と言葉を来夢にぶつけながら、蜜柑は泣き荒れた。
　それでも蛍がくれたカメ便をぎゅっと離さない蜜柑をみて、来夢はさっそく蛍に書く手紙の便箋を買いに行こうと提案した。

　半年後。あの日から欠かさず郵便ポストを探る蜜柑がやっと蛍から手紙が来たと喜ぶのも一瞬、半年もかかった事とその素っ気ない文章に泣き崩れていた。
「蛍ちゃんは面倒臭がりだからのぅ……」
「しかも暑中見舞いにしても素っ気ない文やもんなー」
「うわーん！来夢やって手紙書いたのにこの内容でなんとも思わんの!?」
　来夢も勿論手紙書いたが、２日に１回出してた蜜柑ほどではない。事情を知っているから、桜が咲いて五年生になりましたと、学校で無理してないかと聞いた２回だけである。
　原作見てても思ったが、手紙の検閲厳しすぎると思う。面談も電話もできないのだから手紙のセーフティラインを上げるべきだ。てか電話もできないって学園のセキュリティレベル変なとこで謎だ。
「寂しいけど蛍が元気そうでよかったやん」

「うぅ、来夢は淡白やねん。蛍はうちを捨ててトーキョー行ったっきりやし、うちは不憫やぁ～～」
「ほらオヤツにホットケーキ焼いてやるから」
「2枚じゃなきゃ嫌やぁ～～」
「はいはい、じいちゃんは？」
「わしは1枚でええのぅ」
佐倉家では今日もホットケーキミックス大活躍なのである。

??

蜜柑が泣き腫らした顔で学校から帰ってきた。原作通り蛍の母から、学園と蛍のことを聞いたのだろう。
じいちゃんに心配されてたが、蜜柑は学園に行くと決めているからか心ここに在らずって感じで夕飯を食べてた。
多分明日になったら蜜柑元気になってるよと、じいちゃんにおやすみを言って布団に潜り込む。
実際アリス学園に仮入学し、北の森を経てアリスが判明、蛍と一緒に居られるということで元気になる。
「来夢もごめんな……」
ウチ、どうしても行きたいねん。夜寝静まった頃、来夢の布団の側でポツリとそんな言葉を零していった。
じいちゃんの枕元に置き手紙をしてヘソクリを持っていったのだろう、ガラガラと玄関の閉まる音を聞いてから寝た。

そしてその日を境に、暗転する現象が無くなった。

「孫が家出したーーっっ」
朝一番にじいちゃんの声がご近所中に響き渡る。その声に導かれたみんなが集まっていた。いつかやると思ってたのよあの子なら、愛じゃのぅ、すごーいみかんちゃん、と外が騒がしい。

「もう片方の孫はココにいるでじいちゃん」
「来夢！蜜柑がへそくりと共に家出したんじゃ！」
空っぽになった壺を抱えながら怒髪天のじいちゃん。問題行動の多い妹である。もっともこうなる未来を知ってた自分が言うのもなんだが。
「しかし蜜柑はへそくり持って一体どこに……」
「昨日クラスで蛍の行った学園について話してたんよ。だから行くとしたら蛍のいる東京やと思う」
「東京!?そないところ小学生がひとりで行くなんて蜜柑は何を考えているんじゃ……」
蛍のことだと思う。そんな言葉をとりあえず飲み込んで、じいちゃんを宥めながら朝食を摂り学校へ向かう。
流石は田舎、蜜柑がへそくり掻っ払って家出したことはもう広まってた。
「蜜柑ちゃんトーキョーに行ったんやって？」
「多分ね～」
「なぁなぁ、やっぱり昨日のうちらが言ってたせいかな？」
「事情を知ってすぐ行動するところはすごいよな」
「来夢、アリス学園ちゅーとこ知ってたん？」
「いや、昨日の知ったばっかりや」
知識をみんなに合わせつつ、女子にも男子にも挙句には先生にも質問攻めされた。田舎からしたら蛍のアリス学園入学以来のビッグニュースだから仕方ない事だけども。
ネットなんてまだ普及してないから、アリス学園の実情なんて本当に限られた人しか知らない。
クラスのみんながどうやって会いに行くのか予想を立てていて、その日は一日中授業がままならなかった。
来夢くんは蜜柑ちゃんと一緒に行かへんかったの？来夢くんも蛍ちゃんと仲良かったやん。
クラスメイトから投げかけられた問い。結論からいうと行けるかわからないから行かなかったのだ。

勿論、蜜柑は来夢を一緒にいこうと誘わないだろうと最初から思っていた。
蛍と蜜柑の間にある親友同士の感情に入れるものなど無いし、そこに自分は大いに無粋である。
行けるかわからないというのは、アリス持ちだったら無理矢理でもついて行って、蜜柑が危険な目に遭わないようにすることもできたであろう。それが物理的に出来ないのだ。
つまり、来夢自身アリスを持っているかどうかわからないのである。
蜜柑のアリスは「無効化」で、近い将来「盗むアリス」と「入れるアリス」が現れる。どちらも他のアリスありきの能力だから、学園に行って初めてわかるのだ。
同じ遺伝子を受け継いでおり、双子である来夢自身アリスを持っている可能性は高いと思われる。だがその３つのうちのどれか、もしくは全部だとしても実証するすべがない。
別に蛍のアリス無効化にできなかったし、盗む気配もなく、アリスストーンが無いので入れることもできなかった。
手を合わせてアリスストーン出来るかと思ったが、それも何の反応もなかった。
もしかしたら全く違うアリスかもしれないとこの１０年、意識があるときは色々な事をした。習い事したり、勉強しまくったり。一番頑張ったのは厄介ごとや揉め事にも間に入りわざとトラブルに巻き込まれたのだ。
何かの拍子にアリスが出現するのではないか、という考えでの行動であったがそんなこともなく今日まで来た。余談だが、この行動が基にみんなのまとめ役と認識されてたのだが、来夢自身そう思われていることに無自覚である。
原作の主要人物は兄弟でアリスが多かったから忘れていたが、兄弟でもアリスが出るか出ないかはわからないらしいし、来夢はアリスが「無い」かもしれないと思い当たった。
できる限りの事は調べたし、確証もないので正直お手上げ状態。

まあ、蜜柑にとって今の段階ではまだ危険なことも大事な繋がりになるし、今のところ大丈夫だろ、というのが来夢の考えである。
今頃蜜柑は北の森だろうか、と考えながら帰宅する。放課後遊びに誘われたが、じいちゃんが心配なので全て断ってきた。
原作ではコマが小さかったが、ここからじいちゃんは蜜柑の安否もわからず、突然の全寮制の入学で心労から病気になってしまうのだ。
せめてもう片方の孫である自分はそばに居なくては。
自分が非アリスの可能性も考えて、これからどうするかも決めなくてはいけない。
自分がいる時点で「本来の」物語からだいぶズレはあるのだ。できれば多くの人に生きてもらいたい。目の前で死を見たとき、きっと自分は耐えられないだろうから。
――その日の夜、一通の電報が届いた。
知ってはいたが、呆然としているじいちゃんを見るといたたまれなかった。
カタカナ混じりの文章は、素っ気ない通り越していっそ冷たかった。

??

蜜柑が入学してから1週間とちょっと。蜜柑は毎日手紙を書いているのにも関わらず、いっこうに祖父からも兄からも返事が来ないことに切羽詰まっていた。
「じーちゃん～～らいむぅ～～手紙～～」
「ええい鬱陶しい」
「んぎゃっ」
蛍と心読みに蹴られて呻き声をあげる。じーちゃんは拗ねると長いし、来夢も勝手に行ったこと怒っているのかと蜜柑は不満気だった。
今2人はどうしているか知りたい一心で占いのアリスの音無さんのダンスをする。

「らいむってだぁれ？」
「蜜柑のお兄さん。ミカンとライムで柑橘系のキョーダイなのよ」
「へぇ～蜜柑ちゃんお兄さんいたんだ～」
　外野でそんな話をしている間に、音無さんのダンスが終わった。
「佐倉さん……貴女のお爺さんとお兄さん、今この学園に来ているみたいよ」
「へ？」
「門前で『孫に合わせろ』としつこく食い下がっては追い返されるエンドレスバトルが見える……。横でお爺さんを支えているお兄さんも見えるわ……」
「な、ナニソレ!?」
　委員長と蛍に咎められたが、諦めきれず泣き止まない蜜柑に蛍が折れて、発明品で外門近くまで見せてもらえることになった。
「見て！じーちゃんと来夢や！来てくれたんや！」
「うるさい」
　たしかに学園の外門には蜜柑のお爺さんと兄の来夢が来ていた。しかしすぐ様子がおかしいことに気付いた。
『お願いです、孫に、ここに入学した孫に会わせてください』
『せめて声だけでも、手紙でもいいんです。なんの音沙汰もなく心配で夜も寝れなくて』
『こう毎日来てもらっても会わせることはできないんです』
『じいちゃん、夜眠れてないからフラフラや、今日はもう無理しないで』
　やつれている祖父、心配気な兄、そして会話の内容。全てが意味わからなかった。
　そのあとすぐに棗から一方的に手紙が一生届くことはないといわれ心が大いに荒れた。棗の言う事を否定したいが実際に届いていない。そこでまた蛍の発明品を使って手紙を書いた。
　真実は、届けるどころか燃やしていたという蜜柑にとって残酷なものだった。

（……今日くらいに蜜柑は脱走するかな）
正確な日にちは覚えていないため、来夢は蜜柑が入学してから1週間すぎたあたりから、夜のアリス学園の外壁近くを張っていた。
蜜柑が蛍の発明品でじいちゃんを見たらもう京都に帰るつもりでいた。
しかし、実際に蜜柑が脱走するまで「見た」後なのかわからないため、こうしてじいちゃんと泊まっているホテルを抜け出して待っている。
勿論夜道対策に防犯ブザーを片手に握りしめている。
自分がいる事でもう原作通りではないが、何が起こるかわからないのもこわい。出来るところは原作に寄せておきたいのだ。
（合気道で鍛えてるけど所詮は小学生。大人に絡まれたら厄介だ）
そんなに沢山の習い事はできなかったが、じいちゃんの友達の田中さん（７４歳）が教えてくれた合気道は重宝してる。でもその出番は無い方がいいに決まっている。
とにかく夜道で人に絡まれず、蜜柑と鳴海先生を発見次第帰るだけだ。
ここに来るまでだって、じいちゃんは蜜柑が心配だからすぐにでも学園に行くと聞かず、付いていくと言っても来夢は学校行きなさいと言われ、やっとの事で一緒に東京まで来たのだ。
蜜柑がじいちゃんを確認次第、じいちゃんには自宅養生してもらう必要がある。
夜寝れなくてやつれていくじいちゃんを見るのは辛かったが、蜜柑と鳴海との信頼関係にはこのイベントを外すわけにはいかなかった。
その時の鳴海の言葉が、蜜柑のチカラになるのだから。
遠くから、バチッという音がした。
きた。出来るだけ物音を立てずに音源の方に向かう。
「気を付けろ、どんなアリスを持ってるかわからないぞ」
「さっさと気絶させて車にでも入れろ」
そこには2人の男に捕まっている蜜柑がジタバタ暴れているところだった。

すぐ逃げると思ったが、様子がおかしい。
原作では蜜柑は男たちから逃げ、そのすぐあとに鳴海が来るはずだ。
蜜柑は男たちの手に捕まったままだし、その周辺に鳴海の姿が見えない。そうこうしている間に蜜柑が車の近くまで持ち上げられていた。
（――蜜柑っ!!）
反射的に手元の防犯ブザーの起動棒を思いっきり抜いて男たちのところにぶん投げた。
耳をつんざくような音が響き渡り、蜜柑を掴んでいた男がビックリして手を緩める。その隙を逃す事なく蜜柑は逃げ出した。
その音につられてチラホラ人が集まり始める。
焦り始めた男たちが再び蜜柑の腕を掴んだ瞬間。
「うちの生徒に指一本触れるな」
（……やっときたぁぁ）
鳴海が登場し、来夢はひとまず2人がギリギリ見えるところまで逃げた。
鳴海が来てくれたことで安心したが、今2人に会うわけには行かない。
男たちが学園の先生が来た事で、捕まることを恐れ鳴海目掛けて爆発物を投げる。
防犯ブザーの比ではない音が鳴り響いた。
（漫画じゃマイルドな表現されるけど実際に見ると血の量がエグい……）
この先の学園アリスの世界で「わたし」はやっていけるのだろうか。不安を胸に抱きながら、とりあえず今も鳴り響いて止まない防犯ブザーの起動棒を2人のそばに投げ、そのままホテルまで走り去った。
2人を確認出来たことだし、明日はじいちゃんと帰れそうだ。
コツン。ボロボロな鳴海とごめんなさいと謝る蜜柑のそばに小さな棒状のものが転がった。

蜜柑は何か分からなかったが、鳴海は思い当たりがあったのだろう、近くに転がっている鳴り止まない防犯ブザーを拾い、その棒状のものをくっ付けることで音を止めた。
「鳴海先生、それ……」
「うん、どこから投げられたのかわからないけど、この音のおかげで蜜柑ちゃんの正確な位置が分かったんだよ」
「う、うちも、その音のおかげで、男の人から逃げられてん」
「……そっか。うん、そうだね。僕らは運が良かった。帰ろう、蜜柑ちゃん」
以前と違う外の危険を肌で感じた蜜柑は、そのまま鳴海と一緒に学園に帰っていった。
蜜柑は初等部寮に帰らず、学園の教員寮に泊まっていくこととなった。
祖父の病気が心配な蜜柑に、鳴海はその事は僕がなんとかすると言う。
色々あって信じれなくなっていた蜜柑だが、飾らない言葉をかけられ、もう一度信じたくなった。
人恋しくなった蜜柑は一緒に寝てもいいかと鳴海の寝室を訪ねた。
勿論と了承した鳴海は蜜柑の思い出話に華を咲かせていた。
「おばけこわい時、よくじーちゃん一緒に寝てくれてん」
「うんうん」
「来夢も普段布団離してるんやけど、じーちゃんが先に寝ちゃったときはくっ付けてくれるんや」
「そっかぁ、お兄さんとも仲がいいんだね」
「うん！……来夢はなんでも出来て、優しくて、たまに作ってくれるおやつも美味しいねん。勉強も好きでな、そこはうちと双子とは思えんってじーちゃんによく怒られてん」
「……ふたご？」
穏やかに蜜柑の話を聞いていた鳴海が、驚いた表情になった。
「うん、来夢は双子のおにーちゃんや」
「……へぇ～、蜜柑ちゃんからよく聞く来夢くんの印象、しっかりした

子だから年が離れている兄妹かなって思ってたよ♡珍しいね、男女の双子って」
「えへへ」
自分の兄が褒められて嬉しい蜜柑は、鳴海が一瞬思案顔になっていたことに気付かなかった。
――蜜柑ちゃん、信頼し合える仲間を沢山つくるんだ。
鳴海と話していた蜜柑は、やがて眠り始めた。蜜柑が寝付くまで鳴海はずっとそばにいた。
（ここに来て双子だったと知るとはね……）
鳴海の机の中にある一枚の調査報告書。佐倉蜜柑の個人情報が書かれており、祖父との関係は養女であった。家系図で兄がいる事も、蜜柑との話からちょくちょく「兄」のことが出てたのでいることは知っていた。
ただ「あの人」が学園から消えた状況を思えば、子はいても1人が奇跡だと考えていた。蜜柑の言う兄は養われ先の家族、祖父と本当に血が繋がっている年の離れた子だとすっかり思い込んでいた。
蜜柑が「あの人」の子である事も確信が無い今、確かなことは実際に血が繋がっているのは蜜柑と来夢であり、蜜柑共々養子なのだろう。
アリス持ちの可能性がある。
学園から目を背けさせたい気持ちもある。これ以上、佐倉蜜柑の祖父から「家族」を引き離すことになるかもしれない。
ただ、どんなアリスを持っているかわからない以上、学園の外では今日みたいな事が確実に起こる。
万が一、人目のあるところでアリスが発現してしまったら？人身売買の組織に学園より先に目をつけられてしまったら？
何より、「あの人」の手がかりだとしたら？
蜜柑の入学から1週間が過ぎた。学園側も身辺調査が個人から周囲に向く頃だろう。
鳴海自身、学園から目を盗んで蜜柑祖父に会うという立場が危うくなることをするつもりだ。

自分が報告するしない関わらず、蜜柑の双子の兄来夢に学園の調査の手が伸びるかもしれない。
――それでも、報告しないわけにはいかない。
自分のために、学園のために、「あの人」ために。
できることなら、非アリスであることを願わずにはいられなかった。

０３話　自分に出来ること

約１週間振りの蜜柑と初めての鳴海との邂逅の翌朝、なんとか祖父自身の病気、残り予算、強引に一緒に来たのを棚に上げて学校にそろそろ行かなくてはと言って、祖父を説得し京都の田舎に帰ってきた。

病院の先生に祖父を頼み、学校へ向かう。

予想していたが学校では質問攻めしかされなかった。思えばここ最近質問攻めしかされてない。この刺激のない田舎では怒涛のスクープ続きでみんな興奮しているから仕方のない事だけれども。

蛍の時のアリスと分かって学園に行く時も大騒ぎだったのに、突然家出した蜜柑がこれまた突然アリス学園に入学したというのだ。

みんな事の真相を知りたくてたまらないのだ。

「一度入ったら卒業まで出られへん監獄みたいな所なんやろ？そのアリス学園っちゅーのは」

「残された来夢かわいそうやな」

「ホンマに会うことできんかったん？」

「じいちゃんと一緒に行ったけど警備が厳重で会えんかった。アリス学園については俺も詳しいことは分からへんから、放課後蛍の両親から聞いてみようと思うねん。みんな心配してくれてありがとうな」

あんま気を落とさずにな、と学校のみんなから気を遣ってもらい、放課後さっそく蛍の家に訪れた。

蛍の学園入学による特別待遇のお金は、今もこの村に寄付しているらしい。なのでここの村に今井家は在住している。

みんなにはああ言ったが、アリス学園については自分が此処の誰よりも詳しい。学園について聞くというのは建前で、他に聞きたいことがあるのだ。

インターフォンを鳴らし、扉から出てきた相手にお辞儀をする。

「突然すいません、ちょっと聞きたいことがあって」

「来夢くん？」

蛍の母は驚いた顔をしながらも家に上がってとお招きされた。

「いま主人は仕事中で居ないけど、私で良かったかしら？」

「はい」
　目の前に紅茶とクッキーが置かれたが、それに手をつけることなくさっそく学園について聞く。
「聞きたいことというのはアリス学園のことなんです。不躾ですが、知っていること教えてください」
「……そんなに畏まらないで。来夢くんも蛍の友達だもの」
　つい先生とかじゃない大人相手になると「わたし」の言葉遣いが出てしまう時がある。ついでに関西弁も綺麗さっぱり抜ける。
　焦ってアワアワしている来夢を見て、それに、と蛍の母は言葉を続ける。
「村のみんなが騒いでいたの。蜜柑ちゃんがあの学園に行ってしまったんでしょう？」
「あっはい。蜜柑が家出したその日の夜に、学園に入学したと電報が来ました。蜜柑は蛍に会いたい一心だったんだと思います」
「……そこまで思ってくれる蜜柑ちゃんと、学園から出られないと言っても、再会できて蛍は嬉しいと思うわ」
　蛍の母は少し俯いていたが、それでも笑っていた。
　しかし次の話題で深刻な顔になる。
「でも来夢くんは何の前触れも無く、蜜柑ちゃんと離ればなれになってしまったのよね。あの日、私は蜜柑ちゃんに蛍が学園に行った理由を話したの。だから私に責任があるわ、本当にごめんなさい」
「そんな！知らないままだったら蜜柑は親友と大きなスレ違いをしたまま、大人まで会えなくなるかもしれなかったんです。蜜柑は本当にアリス持ちだっただけのことです、今井さんのせいじゃ無いです」
　来夢は必死に蛍の母が責任を感じることは無いのだと熱弁する。
　幼い今井昴を学園に送ってしまったという過去から、家族が引き離されることに敏感になっているのだろう。悲しませたくなくて話題を変えることにした。
「蜜柑が入学したのはもう変えられない事実です。でもじいちゃんを少しでも安心させたくて。アリス学園について、アリスについて俺とじいちゃんは知らないまま東京に行きました。アリス学園の近くま

で行っても分かることは無かった。だから知りたいんです」
「お爺さんの為にも、か。来夢くんは偉いわね。私に協力できることはするわ」
　それからアリスは超能力のような特別な才能の事であること。先に入学した蛍の兄、今井昴から手紙の返信が無いこと。その事から親が嫌いになったかもしれないと心配であること。もうすぐ大人になるだろう彼と、学園に入ってから1度も面会もできてないくらい外との繋がりを絶っていること。何処から情報を掴んだのか、蛍にアリスがあるとわかった途端学園に追いかけ回されることとなったこと。学園はとても高い情報収集能力があるのではないかと色々話してくれた。
「私が知っていることはそれくらい。手紙も来たことないから、学園の内情を知らないの」
「……そうなんですね」
　原作で知ってる通りだったが、今井昴の事情、学園から家族を盾にされ縛られている状況を思えば、ここでも家族で思いのすれ違いが起きてると思うともどかしかった。
　本来優等生である今井昴が、会いたい家族に会う手段も資格もあるというのに、学園にとって不都合があれば、その生徒の家族を脅しにつかう学園のクソさ加減に胃のあたりがぐるぐるする。
　すっかり冷めた紅茶を飲み、心を落ち着かせ本題に入る。
「今日聞きたかったことは他にもあるんです。蛍のお兄さんや蛍はどんな状況でアリスだと分かったんですか？」
「……昴は主人が怪我した時、治そうとして近づいた瞬間治癒のアリスが、蛍はオモチャを作る感覚で色んな不思議なモノが溢れさせてた時に発明するアリスがあるのだと分かったの」
　聞いて想像するに、今井昴は治癒のあとに痛みのアリスがわかったのだろう。
　どちらもごく自然に呼吸するかとようにアリスがわかったようだ。
「どちらもアリスがあるんですよね、他に兄妹が共通してることありますか？」

「兄妹でアリスだから……あっ、」
　蛍の母は来夢の聞きたいことが何か気付いたのだろう、持っていた紅茶のカップを乱暴において、一気に顔色が悪くなった。
「来夢くん、もしかして……」
「――はい。今井さんが考えていることで合ってます。今井さん家で兄妹はどちらもアリスを持って生まれた。だから、蜜柑がアリス学園に入学したってことは、俺自身同じくアリスを持っているかもしれないんじゃないかって思って」
「そんな、でも確かに、あり得る……。それで来夢くんは私に聞きに来たのね」
「はい。やっぱり可能性は高いみたいですね」
「私も自分たち家族以外のアリスの人に会ったことないから、断言できないけど、昴と蛍がそうだったんだもの。来夢くんは自分で何かのアリスを感じる？」
　来夢はいいえ、と答える。それに蛍の母はホッとしたような顔をし、しかしすぐに思案顔になった。
「俺がアリスを持ってるか持っていないのか、今のところ分かりません。でももし持っていたとして、学園に行くことになってしまったら、じいちゃんをお願いしたいんです」
「えっ？」
「村のみんなも優しいのでじいちゃんに気を遣ってくれると思います。でも、アリスの子を持った親として、今井さんがじいちゃんの何よりの理解者です」
　勝手だと承知です、じいちゃんをお願いできないでしょうか。
　来夢と蜜柑の両親を見たことないから、２人にとって祖父は唯一の保護者なのだ。
　来夢は祖父を残して行くかもしれない可能性に憂いを感じていた。
　自分も辛いはずなのに、未来を見据えて大好きな家族を守ろうとする来夢に、蛍と同じ不器用な愛情を感じた蛍の母は、もちろんと答えた。
「もう、本当にそんな畏まらないでいいのよ。蛍に大事な思い出を

いっぱいくれた来夢くんと蜜柑ちゃんにはとても感謝してるもの。当たり前のことよ」
「……ありがとうございます。何卒よろしくお願いします」
ぺこりと頭を下げる来夢。大人顔負けの敬語つかったり礼儀正しいかったりする来夢は、両親がいない分しっかりしなくてはという部分が少なからず合ったのでは無いかと蛍の母は考える。
まだ小学生でそんなにしっかりしなくてもいい、まだまだ子供は甘えていいと思う一心で来夢に微笑みかけた。
「蜜柑ちゃんたちももらったかしら？蛍から最近やっと手紙が届いたの。だから時間はかかるかもしれないけど、蜜柑ちゃんからも手紙が来ると思うわ」
「はい、もらいました。じいちゃんもそれを聞けば少しは安心します」
「蛍から手紙が来たということは、昴は昴自身の意思で返信をしないのかしら……。まだ何も知らなかった昴を学園に送ってしまったのは私たちだもの、恨まれても仕方のないことね」
「そんなこと……！」
ごめんなさい、来夢くんにこんなこと言ってしまって。
そう悲しげに笑う蛍の母をみて、そうではないというに言えないもどかしさから、来夢は言おうと思ってなかった言葉がポロリとこぼれた。
「カニ食べ放題の時みたいに、また佐倉家と今井家でご飯を食べましょう。今度は蛍のお兄さんもいっしょに」
言った後に来夢は自分が何言ってるのか、内心びっくりしてた。
その言葉に蛍の母は目を見開いている。
あの時の記憶は今でも鮮明に覚えている。蛍だけでなく、逃げてばかりいてろくにご近所付き合いをしてなかった蛍の両親にとっても、幸せの記憶であった。
なんて優しい子だろうと、夢のような提案に、蛍の母は顔を覆い隠す。
「ありがとう、来夢くん。ありがとう……」
耐えきれなくなった蛍の母が、一筋の涙を流して来夢にお礼を言っ

た。息子に嫌われているんじゃないか、学園から帰って来ないんじゃないかとずっと不安だった蛍の母にとって、それとてもあたたかい未来予想図だった。

紅茶のおかわり入れてくるわね。

コポコポといい香りの紅茶が注がれる音がここまで聞こえてくる。

丁寧に紅茶を入れている後ろ姿に、今日本当に聞きたかったことを、来夢は勇気を出して、今日訪ねた「本当の」理由を投げかける。

「……今から聞くことが、答えたく無かったら無視してください」

「え？」

今井家と佐倉家でご飯をまた一緒に食べる約束。さっきうっかりしてしまった約束だが、何もせず原作のまま進むのなら、その未来は限りなく不透明である。

今井昴と今井蛍は日向棗を救うため、蜜柑のためにタイムトリップのペナルティで時空を彷徨い、みんなからの記憶からもほとんど消されてしまう。

原作では2人はいつそのペナルティから解放されるか明言されてないはずだ。

「学園にいるはずの2人と二度と会えないとなってしまったら、どうしますか」

紅茶を注ぐ音がピタッと止む。振り向いた蛍の母は、質問の意図を図りかねるような顔をしている。

ついさっき優しい約束をしてくれた子とは思えない、唐突すぎる質問に驚き固まっている。

しかし、真剣でどこか不安げな来夢の様子を見て、蛍の母はまっすぐに見つめ返して答えた。

「見つけるまで探すわ。たとえ遠いところであっても、アリスという人智を超えた能力に拒まれたとしても」

凛と背筋が伸びる声だった。それは混じり気のない、本心であっ

た。
「二度と会えなくなるなんて、そんな悲しい事簡単には信じられない」
「恨まれても、離れていても、私にとって大事な家族であることは何一つ変わらない」
「一生涯かけてでも、会って家族との時間を再び紡ぎたいの」
「ゆっくりでいい、ぎごちなくたっていい、私は貴重な子供のときの時間を家族離れて過ごしてしまった分、たくさんお話もして甘やかしてやりたい」
「そしてその上で昴と蛍が元気なら、これ以上望むことなんてないの」
原作では描かれなかった蛍の家族の本音。
いきなり残酷な仮定を言った来夢に対して、それでも真摯に答えてくれた。
――この人と蛍たちを引き裂きたくない。
自分のエゴだが、さっきの約束を実現したいと強く思った。
来夢はこの「世界」でひとつの覚悟を決めた。

「……変なこと聞いたのに、答えてくださりありがとうございました」
「ううん、だからといってはなんだけど、来夢くんの両親も2人を探していると思うわ。きっと」
「へ？」
蛍の母からすれば、来夢自身の両親の事だと思っての発言だと考えてた。
知らぬは蜜柑ばかりで、村のみんなからも蜜柑と来夢の兄妹に両親がいないのは、置いていかれたか、他界したのだろうというのは周知のことだったのだ。
両親と会えない来夢は寂しかったのではないかと思い、それ故にあのような質問したのだと考えた。
当の来夢はなぜイキナリ俺の両親のことが？と突然会話に両親が登場したことに困惑していた。
しかし愛おしげに微笑んでる蛍の母に、これ以上何かいうのも憚れて、とりあえず来た時から鎮座してるクッキーにやっと手を伸ばした

来夢であった。
ふと時計をみるともう良い時間だった。
蛍の母とお別れをしたあと、病院にいる祖父を迎えに行き、そのまま一緒に自宅に歩いて帰る。
その帰り道で、うっかり自分が知ってる情報を話さないようにしながら、蛍のお母さんから聞いた分だけのアリス学園のことを祖父に話す。
「そうか、蛍ちゃんも蜜柑もそんな厳しいところに行ってしまったんじゃのう……」
「じいちゃん」
「来夢も蜜柑が居なくなって寂しい思いしてるというのに、心配かけたわい。すまんのう」
「ううん、俺は大丈夫だよ。それにすぐにとはいかないけど手紙もくるだろうって今井さん言ってた。だからじいちゃんこそ身体大事にしてな」
「そうじゃな、来夢」
文化祭の終わる時期に、鳴海が蜜柑の手紙を抱えてじいちゃんのところに訪ねるはず。そのことは話せないから、とにかくじいちゃんを安心させることに精一杯だった。
病み上がりのじいちゃんに、兄弟でアリスの場合があるということを話すことができなかった。

??

その日の夜。
じいちゃんに栄養のある夕飯を食べさせた後、早々に寝てもらった。
蜜柑が居なくなって広くなった部屋の中で、頭の情報を整理しようと目の前に2冊のノートを置く。
1つは「わたし」が覚えている限りの学園アリスのストーリーをまとめたもの。

幸い「わたし」の記憶は休日に学園アリスを一気読みした所で止まっている。
暗転してはノートに忘れる前に書くを繰り返してやっと8歳の頃に完成したものだ。
人に見られてはマズイので簡単な暗号化してる。
人名を使わないようにして文の2文字目と5文字目を交換したり、いたるところ×印で文字を消してみたりと、足りない頭ではそれくらいしか思いつかなかったが。
もう1つは、母親である安積柚香の軌跡を追ったもの。
正確には安積柚香だと思われる軌跡である。
自分が何かしらアリスを持っているかと模索してたが、めぼしい成果も無い時に非アリスの可能性に行き当たり、それで何ができるか考えて、新聞などを隅々まで見ることが始まった。
直接的にアリス学園のことが書かれてるものがほとんどだが、稀に、深夜に爆発音が発生するも怪我人は確認されてませんとか、あった筈の建物が突然消えたなどといった、アリスによるものと考えられる事件が新聞に小さい記事で載っているのだ。
1冊目が書き終わった時期にこのノートを作成し始めた。
全てが安積柚香と関わりあるわけではないだろうが、今後非アリスだった場合蜜柑たちと違い学園の外で活動することになるだろう。その時に何かの手がかりになるかもしれないと、3、4社の新聞を見比べちまちまと記事をメモしたり、事件が発生した土地を明記したりしていたのだ。
このノートの後ろに貼っている日本地図にはその土地に赤い印がつけられており、生物分布図とみたいになっている。
全国的に分布されてるが、東京近郊に集中していることがわかる。
2冊を比べると前者は古いわりに綺麗で後者は分厚くなっている。
この2冊は手放す訳にはいかないが、保存・管理にいい方法が思い浮かばない。
ウンウン唸っていてもアイディアは出ないので、とりあえず管理方法は保留。

次に今後の目標。
再三言うようだが、佐倉来夢が存在している時点でもう本来の物語からズレているであろう。
本来の物語は犠牲者も被害者も多く、決して大団円のハッピーエンドでは無かった。
しかし、そんな犠牲があったからこそ生まれた尊いものもあった。希望もあった。
それを自分如きが、本来ある筈だった事を無くしたり全く別の運命が生まれたりして良いのか、この約１０年間葛藤してた。
でも「わたし」は帰り方も分からない。１人だけ漫画の人物と触れ合える謂わば異物だ。
だから、この世界は皆が死なず、笑顔でいられるエンドを迎えてもいいのではないか。
そのためにできる事をしたい。漫画では実際に描かれなかった名もなき人たちも、幸せになるために。
蛍の母との会話で、あの真剣な目で、心が定まった。
「安積柚香の生存。日向棗、茨城のばらの危篤回避」
「それによって今井兄妹のタイムトリップペナルティ回避。出来れば蛍の外国行きも回避」
「初等部校長側の人達を早めに不信感を持たせる」
「ゆくゆくは学園の体制を正す」
パッと考えただけでかなり壮大だ。本当に1人でできるか？
てか最後のはなんだ教師の上に行くつもりか自分。
でも考えれば考えるほど、成人も迎えてもいないこどもを危険な目に遭わせすぎな学園なのだ。それを思うと考えずにはいられないから仕方ない。
小学生の自分がもってる優位性は、原作知識と言う名の情報だけだ。
習っている合気道も、素人に毛が生えた程度だろうし、実戦ではあまり使えないだろう。
大きな目標ができても、それに至るまでのプロセスがまだ不透明

だ。
２冊のノートを見比べながら、今後自分は何をすべきか考え、夜が更けていった。

「来夢、朝じゃぞ」
じいちゃんの声が聞こえハッと目を開ける。ノートを開いたまま寝てしまってたようだ。
急いで机の中に仕舞い、部屋を出る。
「おはよ、じいちゃん」
「おはよう。はよう食べんと学校に遅れてしまうわい」
「あ、ほんとだ」
この時間じゃニュースも見る暇がない。昨日色々あって寝すぎたようだ。
朝ごはん食いっぱぐれは勘弁だ。じいちゃんの味噌汁は世界一美味い。
――そんな久方ぶりの穏やかな朝だった。
ピンポーン。
インターフォンが居間に響く。じいちゃんはなんだなんだこんな時間に、といそいそと玄関に向かう。
来夢はそれを見ている時間はないので黙々とご飯を食べていた。

「アリス学園の者です。本日は佐倉来夢の調査で参りました」

その一言に来夢とじいちゃんは凍りついた。
こんなにはやく来るなんて。
来夢は自分の浅はかさに、箸を強く握りしめることしかできなかった。